

その街に傘職人は一人しかいない。急行列車の終点にある、それなりに開発はされているが、自然も残る、調和された街だった。唯一の傘職人であるユサンは父親から継いだ傘を作り続け、その傍らでカフェで働き生計を立てていた。街の人々はユサンの傘を使うが、しかしその流通は街にとどまっているために、そのようにしてきりもりをしていた。

雨になると街はユサンの傘に包まれる。ユサンはいつもその光景に静かな面持ちで応えていた。その街はよく風にさらされる。そうするとどれだけ傘が強くとも、飛ばされたり、壊れたりした。それにも構わず、街の人はユサンの傘を使い続けた。

そんな街のある日、ユサンの働くカフェに一人の女性がやってきた。扉の上のベルが揺れてユサンがそちらを向くと、街では見たことのない女性だった。

女性はオーバーオールに綿のスカート、黒のブーツを履き、突然降り出した雨に、カフェに避難してきたようだった。

「けっこう降っていますか？」とユサンはタオルを手に取り、女性に渡した。

「ありがとうございます。曇ってはいたんですが、いきなり降ってきましたね、たくさん」と言ってお客を、窓際の一人席に座った。彼女はカプチーノを注文してから窓の外を眺め、やがてしばらくは雨は止みそうにないと判断したからか、ポーチから本を取り出し読み始めた。

平日の夕方、この時間帯は本来なら客足もあったが、この日は少なく、店の中は雨音が響いていた。控えめな照明、食器が擦れる音、香りが混ざり合ってお客を作り上げていた。ユサンはカプチーノを持っていくと、女性は本を閉じて会釈した。

「旅行をなさっているんですか？」とユサンが尋ねた。

「ええ、ちよつと息抜きも兼ねて、ここにしばらく居ようかと考えているんです。よくお分りになりましたね」

「この街はとても小さいですから、人の顔もすぐ覚えてしまうんです。他所から来た方は大体すぐわかりますよ。どうぞゆっくりしてってください」

雨足はどんどん強くなっていき、店を閉めようとする頃にも止む気配がなかった。走ればなんとかなるかしたら、と決めあぐねる女性に、ユサンは傘を差し出した。

「店の置き傘です。使いますか」彼女は傘を手に取り、布を品定めするように、思わず見つめた。

「とても良い傘じゃないですか。こんなものお借りできません」するとユサンは笑った。「その傘は僕が作ったものなんです。というより、この街で使われてる傘は全て僕が作っているんです。自分で作ったものを良いとおっしゃって頂けるのは、中々悪くないですね」彼女は再び傘を見つめた。

「とても素敵な傘です」

「傘はいくらでも置いてありますから、遠慮せずを持って行ってください」

「ありがとうございます。お気遣いしてくださって、お借りしますね。また今度お返しに伺います」

「お気になさらず。僕はずっとこの店にいますよ」

「お礼というほどでもないのですが、私のアトリエにもぜひいらっしゃってください」

「アトリエ？」

「はい。まあ、ちゃんとしたところでもないのですけれど、自分のペースで絵を描いているんです。もし気が向いたらぜひいらっしゃってください」そう言ってメモ帳に彼女は住所を記して破り、ユサンに渡した。それから彼女は店を出て傘を開いた。雨に濡れた街並みに彼女の姿が溶けていくのをユサンは見届けた。それから大事そうにメモをポケットにしまっておいた。彼女の名前はイサギと言った。

二

それから二日経ってから雨は止み、からっと乾いた晴れた天気になった。ユサンは休みの日にイサギのアトリエに向かうことにした。

白い塗りで統一された街並みはユサンをいつもわくわくさせた。晴れた日には一層街は輝きを放ち、街を好きにさせた。車道を挟む花々の咲く茂みは香りを漂わせ、人の知らぬうちに街を抱擁している。

角に面したイサギのアトリエは二方向をガラスで囲い、薄いカーテンで覆われていたが、うっすらと店の中を見ることができた。イサギは木製の小さな腰掛けに座り、髪を後ろで束ねてキャンバスに向かっていた。扉を開いてもイサギは気づかなかった。軋む木目の床に真っ白い壁、いくつかの水彩画が飾られていた。風景が描かれている。この街の周辺の風景ではなかった。大きな鉄橋、夕暮れに当てられる建物、どれも素人のユサンでもイサギの絵だと判断できるほど、オリジナリティの通ったタッチだった。絵を一枚一枚丁寧にみるたびに歩き、歩きたびに床は軋み、三枚目の軋みでようやくイサギは訪問客に気づいた。

「来ていたんですね、何か出してくれます」と大慌てでパレットを腰掛けに置き、奥に入って

いった。部屋に一人残ったユサンは、未完成のキャンバスを観た。かすかに鉛筆で曲線が描かれ、ところどころアクリルで色をつけられている。しかしどれだけ情報の断片をつなぎ合わせても、イサギが今、何を描こうとしているのか、完成形がユサンには見えなかった。

イサギは腰掛けをもう一つ出し、それから麦茶を出した。

「これは何を描いているんですか？」

「こころのありようを描いている」二人揃って絵を見つめた。

「この青色は不思議な色ですね。明るいの、なぜか暗い気持ちを思い起こさせる」

「ありがとう。色を作るのが好きなの」

「これは誰のこころのありよう？」

「私」それからユサンは少し黙って考えた。

「これはどういう気持ちなんですか？」

「わからないから描いてるんです」

「なるほど」

「あなたの傘の色も綺麗だった。あれはどうやって作っているんですか？」

「染めて作っているんです。最近みんな傘は足りているみたいで、作業も減ってしまったけど。でも染めて色を作るのは楽しいから、傘を作らなくとも、いつもいろんな色を作ったり実験したりしているんです。一緒ですね」ユサンが笑うとイサギも笑った。

「また今度ゆっくりお話ししましょう。いつもあのお店にいるの？」

「大抵はあそこにいるよ。お店が閉まった後も使えるし、また会おう」

それから二人はカフェで多くのことを話し合った。イサギはこれまで赴いた土地やそこで描いた絵のことを、ユサンは今までに作った傘と、その傘それぞれに込めたもの、そしてどのような人に売ったのか、互いの思い出を触れて確かめるようにして共有した。イサギが街に訪れてから、日も浅かったが、二人の時間は濃密なものとなった。

「家に帰りたくなったりしないの？家族に会いたくなったりとか」

「そんなこと考えたことは一度もないな。というより、母親から避けるためにあっちこっち彷徨ってるんだ」

「父親とも仲が良くないの？」

「父さんは亡くなってしまった。ちょっと前にね。思い返してみれば、父さんが亡くなるから、放浪を始めたような気がする」

「気がする、というのは？」

「あんまり覚えていないの。父さんは誰かに殺されてしまったんだけど、犯人も見つかっていない。その頃は死でいっぱいになって、記憶が曖昧になってるんだ。今ではだいぶ平気になったんだけど、その頃はお医者さんに診てもらうほどだったの。確か旅行をお勧めしてくれたのもお医者さんだった気がする。療養として、ね」ユサンは話をひとしきり聞いて、ため息をついた。

「そうなんだ、大変だったろうね。自分と歳が近い人が、そんなけえ意見をしているなんてね……。僕なんかずっと街に頼りっぱなしだな」と言うとイサギは笑った。

「それはそれで良いことじゃない。ここはとて過ごしやすそうな街だし。一度も外に出たことがないの？」

「ううん、専門学校に通っていたときは、一度だけ街を出ていたんだ。だけど優秀な人たちが多くて、結局は卒業してからここに戻ってきた。都会と比べたら、この街なんてつまらなくてちっぽけな、隅に追いやられた場所だろうけど……。でも僕にとってはここが世界の中心だし、救われてもいるんだ。だから恩返しというのも含めてここにいる」

「それでも十分立派よ。私なんか、お世話になったものに恩返しなんてこれっぽっちも考えないし、同じところに留まり続けられないから尊敬するわ。これからもこの街を出ようとは思わないの？」そう訊かれて、ユサンはちょっと考えた。

「どうだろう。そんなこと考えたことすら無かったからわからないな。でも少なくとも今、僕は、ここで、事足りてるし、必要とされてもいる。だからしばらくはここにいるかな」今度はイサギがため息をついた。

もったいない。あなたの傘はもつと多くの人に知られても良いのにね」ユサンは謙遜するが、イサギは引かなかった。

三

明くる日、イサギは小さな公園で絵を描いていた。スケッチブックを一冊、鉛筆を四本、それを入れるケースだけを携えた軽装で、野原に腰を下ろした。

イサギが一つの場所に腰を据えろと行うのは、その土地の人のスケッチだった。遊んでいる子供、忙しそうに公園を素通りする人、歩いている老人、そのみてくれをつぶさに描いた。その土地にいる人がどのような服を着て、どのようなモノを食べ、どのような肉付きなのか、その生活のありようをフラットに描きたがった。2BからHBまで、様々な硬さの鉛筆を駆使して描いていった。

イサギがその作業に没頭していると、誰かが後ろから近づいてきても気づかない。ある程

度完成に近づき、ふっと緊張を解いてから気づく。背後から女の子がイサギのスケッチブックを覗き込んでいた。女の子は整った顔立ちをしていた。綺麗にまつげは長く軽く上を向き、唇は潤い、黙っているだけでも人を惹く魅力を感じた。ページのロングスカートに落ち着いた青色の上着を羽織り、落ち着いたこの街に逸脱しない程度に、洗練さを保っていた。イサギは覗き込む女の子を至近距離で、少し見ただけでどきどきしてしまった。イサギとはそれほど年齢は離れていないさそうなもの、確かな差を感じられる具合に幼さが残っていた。

「ごめんなさい。何をしているのか気になっちゃって。素敵なイラストね」女の子はイサギの線画を褒め、イサギは笑顔で応じた。

「ありがとう。あなたみたいな綺麗な子にそう言ってもらえると嬉しいわ」女の子はさっとスカートを払ってイサギの横に座った。

「もっと他のイラストを見せてもらえませんか？」

「いいよ。ここにあるのは鉛筆画だけしかないけどね」女の子はスケッチブックを受け取り、絵を鑑賞した。一ページごとに丁寧に時間をかけ、注意を払っていた。イサギはその女の子の横顔の美しさに見惚れていた。高校生ぐらいの年頃だろうか、と考えるが、これからさらに垢抜けて彼女が美しくなることを想像すると、恐ろしさすら感じられた。しばらくして女の子は満足したようにスケッチブックを閉じた。

「ありがとうございます。どれも素敵でした。こういうお仕事をなさっているんですか？」

「ええ、普段は描いた絵を売ったりしてるの。これは息抜きとか練習、といったところかしら」女の子は満足げなため息を漏らした。

「素敵な才能ですね。女性なのに。ここへきたのはいつなんですか？」ユサンのように、やはりこの街にいる人々は、他所から来る者に敏感なのだと思い、ふっと笑ってしまった。

「二、三週間ほど前ですね。少しずつ慣れてきたかな……といった具合です。あなたは学生さん？」

「はい、すぐそこにある高校に通っています。まあ、この街に高校なんて一つしかないんですけどね。来年にはもう卒業します」

「いいわね。大学は都会の方へ行くの？」

「そうしようか、まだ少し悩んで……。お願いがあるんですけど、これを捨ててきてもらえませんか？」イサギは突然お願いをされたことに少し時間がかかった。

「捨てる？」

「はい、大したお願いではないんです。でも、私にとってはとても大事なお願いなんです。カントンなこと、あそこのゴミ箱にこれを捨ててきてほしいんです」そう言って女の子は公園の隅の水飲み場の下に子にある、網状のゴミ箱を指した。もう片方の手には傘が握られている。

「これを捨てるだけでいいの？」

「はい、それだけです」

「何のために？」と訊くと、女の子は黙ってしまった。イサギは渡された傘を見た。木の柄に染められた布の面、明らかにユサンが作った傘だった。しかしそれを訊くのは止しておいた。訊くべきでないと直感的に思った。

「あそこに捨てるだけでいいのね？」

「ええ、本当にそれだけです」荷物を置いたまま立ち上がり、言われた通りイサギは傘を捨てた。ゴミ箱は1割ほどゴミが溜まっていた。その中に傘を刺すと、生花をいけているような、傘立てとしかみれないような、奇妙な気持ちに包まれた。

ゴミ箱のある場所から元々いた場所の方を見ると、女の子はずっとそこにいた。ひとまず元の場所に戻り、また座った。二人で顔を見合わせ、沈黙の間が生まれた。

「ありがとうございます。わざわざ私のお願いを聞いてくださって」

「あれは何だったの？」

「挨拶みたいなものです」

「そっか」としかイサギは言えなかった。

「私、みさきと言います。ここに来たら、また会えますか？」

「そうね、いいところだし、また来ようかな」

「いつまでこの街にいるつもりなの？」

「しばらくはここにしようかと思っている。過ぎしやすいし、とりあえず何かを完成させるまでは」

「描いているのは風景だけなの？」

「そうね、確かに最近は風景が多いかな。なぜだろう。父さんが亡くなってから、人を書かなくなった気がする。スケッチ程度に描いたりはするけど」

「それはどうして？」

「何だろう……。人の顔が怖いかもしれない」

「怖い？」

「昔は人の目が怖い時があった。それが再発したのかもしれない。今だと怖くて鏡が見れないな」

「何をそれほど恐れているの？」じつとイサギは腕を組んで考えてみたが、答えは出なかった。

「わからない。けど……。何かとてつもない力を感じることがある。それに敏感になっちゃって、おそれているんじゃないかしら」

「それを描いてみたらいいんじゃないのか」

「え？」ようやくイサギはユサンの顔を見た。

「自画像みたいなのをさ、描けば克服できるのかもしれない。それは生身の人間じゃないし、鏡でもない。でも確かに顔だし、自分で作り上げられる顔だから」

「……」

「自分を見つめ直すいきつけになるかもよ」それ絵から塞ぎ込んで、イサギは考えてみた。

「今までだって、自画像みたいなのは描いたことあるだろう？」

「……まあ、いくつかはあるね……。それもだいたい前だけ」

「ちよつとずつでもいいからやってみなよ。鏡を見れないのなら池でも眺めれば良いしさ」
「池？」

「水面に映る自分を参考に見るのも面白いかもしれないよ。波が立って変わり続ける。鏡が怖いのは、固定されている状態が怖いかもしれない。変わり続けている状態の方が、案外本当の顔に近いのかもしれない」

「でも、そもそも自画像を描く必要性は、どこにあるんだろうか」

「何に自分が恐れているのかわかるかもしれない」

「恐れ？」

「君はタフだけど、存外恐れているのも多いように見える。それがつながっているかはわからないけど、少なくとも君自身がそれを自覚すらできていない。けれど恐れは確かにぼんやりとあることはわかっている。そうだろう」イサギは否定しなかった。沈黙が続きを促す。

「君がそれで良いんだったら構わないけど、その状況を変えたいのであれば、自画像を介して恐怖と向き合えるかもしれない。それには意味があると思う」そこまでユサンが話すと、

イサギはため息をついた。

「あなたは今までに絵を描いたことがあるの？とても説得力がある」

「絵は描いたことは無いよ。でも傘の模様を描くこともそれに近い。その作っている時々を色や形として模様で具現化しているんだ。だからそれを通して自分を理解しようとしているってのは君と一緒にかもしれない」最後に一杯ずつ飲み、それから別れた。イサギはその晩、布団の中でユサンの言葉を考えた。それから女の子の子のお願いのことも。

四

次の日から再び、イサギは公園に向かうようになった。目的は公園にある池である。石垣に囲まれた池は濁っていたが、鯉が自由に泳げるほどの開放感があった。池の淵に腰を下ろして、しばらくは池がさざめく様とそれをさらう風が周囲の木々を揺らす様をながめた。しかし、なかなか池を覗き込む気にはなれなかった。生来、鏡やカメラが苦手だったイサギは、ユサンに話した通り、父の死を経てからというもの、その性分が激化していた。鏡はおろか、金属に映る自分の顔でさえも嫌悪し、ガラスもまた同様に見て見ぬふりをして避けていた。そのような生活の中、湯船に浸かる時も、そこに自分の顔が写っていることにすら気づかずに、のぞこうともしていなかった自分に気づいた。そのような単純なことにも気が配れなかったほどに、自分自身がせわしなく生活をしていたことにも気づいた。それでは水面を鏡とみなし、向き合ったらどうだろうか、いざ意識を持ってみると、とても恐ろしくもあった。自分がなぜそれほど恐れているのか、イサギにはわからなかった。もつと言えば、今までも鏡を恐れていゝまよを言語化できなかったよすゆなかつた。そこにはただ恐ろしさだけがあつた。そこまで考えると、イサギにとつてのその恐れはとても根源的であることに気づいた。理屈抜きの、ただひたすらの本能での恐れがある。それ自体は興味深くもあったが、やはりそれに対する恐れが勝つた。

イサギはそれを水として受け止めようとした。水面は水のただの一つの端にある面ではないのだと割り切り、池の麺を覗いた。実に数ヶ月ぶりに自分の顔と見つめあつた。不思議な感覚だったが、嫌悪感はなかった。風は常にそよぎ、水が揺れるにつれ顔も揺らいでいた。おぼろげな輪郭は本来の形に戻るかと思えば強い風に崩され、揺れるだけ揺れると再び元の形に戻ろうとし、それを繰り返していた。しかし二つと同じ顔はなかった。正確な顔がわかるはずもなかったが、安心することのできたイサギがいた。

このまま見ていられる、と確信したイサギはそのまま水面を見つめた。自分の顔が風と水に歪む様を見つめた。最初に感じたのは、少し眉が上に歪むと、母のそれに似ることだった。

しばらく顔を見合わせていなかったが、そのまま母に思いを馳せていた。決して仲が悪いわけではなかったのは、母が家と血を、個人よりも重んじる思想に取り憑かれていたからだ。例えばイサギが絵を描き始めたのも幼心からの、その母の思想への反発だったのか、それをずっと続けて、いつしか生業となっていたのだった。そんなイサギを母は強く嗜めた。年齢が上がるにつれてイサギの反発は強くなっていき、母もそれに応じて過激になっていった。

一部の思春期の男女がそうであるように、イサギは二十歳を迎えるにあたって、ひどく精神を荒ませていった。母とのいさかいは一向に収まらず、日毎に行われていた。イサギはどうしようもない気分になると、心を閉ざし内に籠ることがしょっちゅうあった。なのでイサギはその時のことをうまく思い出せない。記憶が錯綜し、所々欠落し、時には自己嫌悪に至るように改竄を自ら施しては自傷していた。その時期の原形はイサギには残っていない。それを見かねた、かかりつけの医者が危険を感知し、イサギを放浪へと誘った。家族から距離を置くことで、再びイサギは正常に記憶を記録できるようになり、人並みに食事と睡眠を行い、そして今に至るのだった。かつての乱雑で失ってしまった時間は元に戻らないし、母との確執も変わらないままだった。どれだけ確執があっても、普段の自分の身振りや物言いに母を思い起さした。眉はよく似ている。それを思い出しただけで、その日は十分だった。水面から目を離し、顔のない水面を眺める時間を作った。それから人とも顔ともつかぬ、その池の様相をスケッチブックに描いてから家に戻った。それから毎日、少しずつでも池の水面で顔を見つめる時間を欠かさずに作った。自画像の構想を描き始めたのは、母の面影を見出してから四日ほど経った日だった。

土曜日の昼、再び公園で顔の輪郭をいくつも描いていた。いつものようにそれに没頭していると、みさきが近くでそれを眺めていることに気づくのに、時間がかかった。ふと顔を上げた先、ベンチにみさきが座り手を振っていた。それから立ち上がってみさきはやってきた。

「調子はどうですか？今は何を描いているんですか」

「自画像を描こうかと思っているの。完成はどうぶん先だと思っただけね」

「へえ……この前までは景色を描いていたじゃないですか。なんで自画像に？」

「自分を見直す良いきっかけになるかと思ったの」

「自分」

「そう、自分」

「絵で自分がわかるものなのでしょうか」

「少なくとも何か行動する限り、そこには自分が表れていると思う。何が表れているのかをこれから探すのだけだ」

「立派ですね」みさきの物言いに、イサギはどこことなく引っ掛かった。

「立派って？どういうこと？」

「どんなモノであれ、何かを作っている人はみんな立派じゃないですか、特に女性は」

「そうね、確かに立派なことかもしれない。でも性別は関係ない」一瞬美咲の表情に影がさした。

「ところで、あのカフェはまだ通っているんですか？」

「そう言えば最近顔はだせてないな。こっちの作業でつきっきりだったから」

「そうですか。それで良いと思いますよ。行かないほうがいいでしょう」

「え？」

「このあいだ、店員さんが言ってたんです。いつも話が長くて迷惑してるって。今度行ったら、知らんぷりされるかもしれませんね」

「それ、本当に本当？」

「はい、本当です」しばらくイサギはみさきの目を覗き込んだが、覗けば覗くほど彼女のことが分からなくなった。

「イサギさんにまたお願いがあるんです」

「また？」

「そう、また、です。なんてことはないんです。前のように、簡単なことなんですが……駅の場所はわかりますか？」

「電車でこの街に来たからわかる」

「駅のすぐ隣に階段があるんです。地下に続く、レンガでできた階段。その中を見てきてほしいんです。それほど広くありません。ただ、一つ注意点があるとすれば、日中は入り口はシャッターが降ろされています。夕方五時のチャイムが鳴ってから開かれる。それから入れます」

「何がそこにあるの？」

「行けばわかります。今、私からは言えません」

「いつまでに行けばいいの？」

「いつでも。あなたが行くべきだと感じた時に。なのでいつでも構わない。けれどあなたな

ら、いつかきつとあそこへ行くことになると思います」
「覚えておく。いつか必要なときが来たら行く」

五時のチャイムはカラスを誘い、子供を家路に誘う。商店街のシャッターは一つ、また一つと降ろされ、街灯が灯り始める。地下への入り口は開かれる。イサギがそこに向かったのは、みさきに言われてから一週間も経った頃だった。

レンガで四方向を閉ざした入り口は、正面と地下へのみ開かれている。夕日が壁面をよりいっそう、赤く輝かせていた。イサギが階段の一番上から一番下を覗こうとしても、数段先はすでに影に飲まれていた。何があるのかもわかるはずがなかった。柔らかな追い風を受け、入口から地下へ吸い込まれていく感覚があった。深呼吸をしてから階段を降り始めた。

降りていくうちに湿度が上がっていくのを感じた。左手でレンガの壁をたぐりながら一段ずつ確実に降っていった。

一段降りようとするといつの間にか降りられなくなっており、階段を下り切ったことがわかった。イサギの周囲は闇に包まれていた。来た方向を振り返ると、遙か頭上に小さな光が見えた。今度は前を見ると、先は何も見えないほどの暗さだった。何が先にあるのかもわからなかったが、先に進んでみた。進むごとに、背後の階段を辿って降りてくる光の気配が消えていった。指で壁を伝って進んでいくと、だんだん闇に目が慣れていった。幸い、分かれ道はなく、ずっと一方通行だった。地下はドーム状になっており、ところどころ、壁はスプレーで落書きがされていた。

それから、扉が見えてきた。近づいてみると、鉄製の扉のようだった。鍵はかかかっていない。みさきの言っていた、見せたいものがこの扉の向こうにあるのかもわからなかったが、イサギは緊張した。扉の取手に手をかけ、軽く引いてみると、扉はそれほど重くなかった。少し息を吸ってから吐いて、扉を開き中を覗いた。

五

その日の夜に、ユサンが店仕舞いをしていると、偶然イサギが店の前を通りかかった。ユサンにはイサギが疲れているようにみえ、思わず声をかけた。ユサンに気づくと、イサギは足を止め、顔を見合わせた。やはりイサギはくたびれているようだった。少し飲んでいかないかと提案すると、イサギはされるがままに店の中に入っていった。

思えばユサンに会うのも久しぶりだとイサギは思った。とても昔のことに感じる。そして地下に降りたのも数時間前のはずなのに、さらに遠い昔のように感じられた。

「しばらく会わなかったね」

「そうね」

「元気だった？」

「まあまあかな」イサギは何を飲んでも上の空だった。

「無理に呼び止めてごめんね。今日はもう切りあげようか」とユサンが言うと、ようやくイサギから話し始めた。

「ごめんなさい、そういうつもりじゃなかったの。ちょっと考え事が多くて、少しくたびれてしまっていた」

「話したくなければ話さなくていいけど、話したいのであれば聞くよ」再びイサギは黙ってしまった。ガラスの中を見つめ、口を開いては言い淀んで息を吐き、少し経ってからようやく声を出した。

「この街を出ようかと思ってるの」ユサンは黙って聞いていた。

「食べ物も美味しいし、公園も心地良いし、ここはそんなに悪いところじゃないと思う。だけど、少なくとも私にとっては、居心地の悪い場所だった」

「それはなぜ？」

「それは言えない。けれど言えるのは、あなたにとっても居心地の良い場所であるとは思えない。はつきり言うけど、私と一緒にこの街から出ましようよ」

「それはなんで？僕は街に不満を感じずに、ここに暮らすことができている。何年間も。ここから出る理由がないよ」再びイサギは黙って考え込んだ。ユサンを説得する方法を考え、それからまた切り出した。

「私はあなたを文化の作り手の一人として、敬意を払っている。だから言ってるの。この街はあなたが留まるべき場所ではない」

「君が僕のことを第一に考えて提案してくれているのはよくわかった。だけどやっぱり、一番の理由は教えられないの？君は街の何が嫌なの？」

「ごめんなさい、どうしても言えない」

「言えない。けど街は出てほしい。そういうこと？」

「そうね」

「そして君も街を出ようとしている」

「明日か明後日にも出ようかと思っている」

「自画像はどうするの？もう完成したの？」

「別の場所で描くことにする。途中で投げ出したりはしないけど、少なくともここで描いたとしても、私は見るべき私を見つけることができない」イサギは淡々と話した。

「悪いけど、少なくとも今はこの街を出たいとは思えない。でも一晩考えてみるよ。また明日、君のアトリエに行ってみようと思う。もし僕の心が変わらなかつたら、君を引き止めるための説得をしに行くことになるだろう」

「それでも、私は説得を聞かないと思うし、あなたを否定することもしない」どちらからともなく席を立ち、帰り支度をした。イサギは店を出る前にユサンを抱きしめた。ユサンも抱き返した。やがて二人の身が離れ、イサギが店から出ようとしたとき、最後にイサギは質問した。

「ユサンは、駅の横にある、レンガの階段を知ってる？」

「レンガの階段？知ってるけど、シャツターが降りてるところしか見たことがないな。それがどうかしたの？」ずっと街に住んでいるユサンでさえ知らないのだ、とイサギはわだかまりを感じた。

「いいえ、なんでもないわ。それじゃあ、またいつか」

「おやすみ」イサギが扉を閉めると、時計の音が店に響いた。

イサギは家に戻ると、そのまま布団に潜った。考えるべきことは多かつたが、その時はゆさんのことしか考えられなかつた。明日の朝、ユサンが街を出ると、そう言ってさえくれればいいのだ、と思った。そんなことを考えていると、いつの間にか眠り込んでしまい、闇に包まれた。

←水鏡。パート

車のエンジン音でイサギは目を覚ました。あたりはまだ暗かつた。黒い暗幕で覆われているような視界の中で、車のライトが目突き刺さり、とっさに布団を被った。布団の温もりに再びとろけそうになったその束の間、布団を剥がされた。イサギは誰かがそばに立っているのを見た。それからのことはあまり覚えていなかった。

次に目を覚ました時は、再び夜だつた。何時間寝ていたのかわからなかつたが、ちゃんとしたベッドに、ちゃんとした家の中にいるのを少しずつ認識した。見覚えのある景色の中で、扉が開いた。

「おはよう」母親だつた。

→水鏡パート

ユサンはその帰り道、イサギの話していた階段が気になって仕方なかった。そこへ行ってみると、みさきがシャッターを下ろすところだった。後ろからユサンに話しかけられ、みさきは飛び上がった。

「これは何？」

「なんでもないですよ」

「なんでもないことないだろうに」

「……ただの廃棄物の集積所です」

「ここは誰でも降りられるの？」

「あなたは許可されていないです」

「なぜ？」

「……男だから」しばらく二人で睨み合い、それからユサンは階段を無理矢理でも降りようとした。

「だめです、あなたは降りてはいけません」みさきは止めようとしたが、女子の力で男を止められるはずもなかった。ユサンは階段を駆け下り、みさきは必死でその後を追った。彼女は何度も行かないでくださいと言ったが、ユサンは聞かなかった。やがて二人が階段を降り切る時には、みさきの声は叫び声のようになっていたが、ユサンは構わずに進んだ。

やがて湯さんは扉の前にたどり着いた。その横でみさきが息を弾ませながら、扉をとる手をつかんでいた。

「これが最後です、お願いします。今すぐ引き返しましょう」

「イサギもここに来たんだろう？」

「ええ、そうです。でもあなたには関係ないことです」

「でもイサギが僕のことを考えて言ったことだ。関係ないはずがない」

「私だってあなたのことを思ってるんです。後で私が怒られるとか、そう言うことはどうでもいいんです。でもここだけはあなたは見ては行けません。これはあなたを思ってるんです。お願いします。開けないでください」ユサンは彼女の言っている意味がわからなかったが、みさきの必死さが気になった。その焦り具合に恐ろしさすら感じたが、ユサンは意を決して扉を開いた。

みさきの悲鳴をよそに、ユサンは扉の開いたその先を見つめた。先にはさらに深い闇が溜まり、目が慣れるには時間がかかった。みさきの言う通り、廃棄物の集積所であることがわかった。

そこにあっただのは、傘の山だった。全てユサンの作った傘で、新品の傘もいくつか混ざっていた。一瞬思考が止まり、それからイサギの誘いを断ったことを後悔した。次の日と言わず、そのままイサギのアトリエに行ったが、既にそこはもぬけの殻になっていた。

←水鏡バート

母親に名前を呼ばれて初めて、イサギは絶望を感じた。それまではどうにかなるかもしれない、と楽観的に物事を考えていたが、どうにもならない事をわかってしまった。

「こっちを見て」イサギは母親の目を直視できなかった。

「こちらを見ることができないの？」

「いえ、できます」イサギは母親の方に顔を向けた。

「できてないわ、目と目を合わせないと意味がない」無意識のうちに右手で左手をさすった。突然母親が右手を伸ばし、イサギの顔をつかんで、無理やり目を合わせた。

イサギが一番気に入っていたのは鏡の前に立って、自分の虹彩を観察することだった。黒くて底のない円を眺めることは、いくらでも時間を注ぎ込むことができた。しかしその時のイサギにとって、母親と目を合わせることは苦痛でしかなかった。

「人の目が見ることが出来ないのね」イサギは動悸が早くなっていくのを感じた。

「病院でおばあちゃんに会わないで、わざわざ電話したのはなんで？」イサギは言い返せなかった。

「スグリ君がどういう顔をしているのか、わからなかったのはなんで？」これまた言い返せなかった。母親は手を離れた。手を離す仕草が優しすぎて、イサギは恐怖を覚えた。

「だいぶ待ったわ」今度は母親の方が顔をそらして、語り始めた。

「あなたの絵の完成を待った。随分と長かったけど、これでもう終わりね」

「……」

「スグリ君も別に乗り気で協力したわけじゃないのよ。だけどあの子正直者だから、すぐ従ってくれる。あなたの婿にふさわしい、良い子だわ」

「……」

「今日で絵を描くのはもう終わり。結婚の準備ももう出来てるわ」

「……絵は？」何も言えなかったイサギは、やっとの思いで言葉を発した。

「……何の絵？」

「……私が、描いた絵。昨日、完成した絵、と、この部屋に飾ってた、絵、全部」イサギはたどたどしい言葉を、必死で繋いだ。その部屋はかつて、イサギが描いた絵が飾られていた。部屋は綺麗に整理されていたが、イサギが描いた絵は一枚も残っていなかった。

「もう終わったのよ」

「……」

「思い出してごらんさい、私の今までの忠告を……。私が今までに、間違ったことを言ったことはある？」母親は席を立って、部屋を出た。イサギは母の忠告を思い出した。母の言葉は全て、正しいわけではなかったが、間違っていなかった。イサギは、私が間違っていたのだと、するりと腑に落ちた。再び枕に頭を預けて、眠りに落ちた。自分の中の二つの部分が、乖離していくのを感じた。

十三

真夜中にイサギは目を覚ました。もう何度目の夜なのかすら、わからなかった。長い間飲まず食わずで眠りこけていたことを思い出すと、無性に喉が乾いたので、おぼつかない足取りで部屋を出て、洗面所に行った。コップに水を注いで一杯飲むと、鏡に映る自分と目があった。その時イサギは、自分作った暗黙の制約を破ってしまった。イサギは止まっている鏡を見てはいけなかった。コップが右手から滑り落ちた。

イサギが動く鏡、水鏡であるとしたら、その時の状態はまさに合わせ鏡の状態だった。顔を合わせた状態になった二つの鏡は、特別なものを移すわけでもなく、無限に鏡を映し始める。イサギは合わせ鏡になることで、自分の間違いに気付いた。

自分が鏡なのではなく、自分の名前が鏡なのだと悟った。母親に、スグリに、イサギは名前を呼ばれる事を恐れていた。イサギは、自分が怖がっていたのは顔ではなく、静止した鏡でもなく、名前なのだと理解した。

数秒遅れて、イサギはコップが床に落ちて割れた音を聴いた。イサギは異常なほどに落ちて着き払っていた。なぜなら母親に、自分が間違っていることを、事前に指摘されていたからだ。母さんのいう通りだ、私は間違っていた、と、イサギはごく自然に自分の間違いを認め

ることができた。幸か不幸か、母親のおかげで、イサギは衝撃に耐え、冷静を保つことができた。

家のどこかで扉が開く音がした。母親が起きたのだろう。イサギはコップの破片を拾い上げて、洗面所を出て、長い廊下を歩き始めた。廊下には均等な距離を保って、片手で掴めるほどの小ささの石像が並べられていたが、それ以外は味気なく、合わせ鏡のように無限に同じ風景が続いた。石像は父親のものだったが、既に亡くなったのだから、いまにきつと母親が捨てるのだろう、とイサギは哀れんだ。少なからず石像を気に入っていたからだ。イサギは廊下を歩くことを楽しんですらいた。無限なものに意味を見出すことはできないからだ。

母親に後ろから肩を掴まれて、イサギは立ち止まった。

「……どこへ行くの？」

「母さん、私、今まで間違ってたみたい」

「どこへ行くの？」

「戻らないと。あの場所は間違っていたいなかった。間違っていたのは、私の直感だった……」
「……俊くんやスグリ君と過ごしていたのに、何も学習してこなかったみたいね」他愛ない動作でイサギは右手で石像をつかんで振り返った。躊躇なく、母親と視線を絡ませることができた。

十四

イサギに名前を与えたのは母親と父親だったが、名前を所有しているのもまた彼らだった。何度もイサギは自分の名前から脱しようと、自ら死のうとしていたが、悉くそれを阻止されていた（主にスグリがイサギの居場所を突き止め、阻止していた）。ならば発想を逆転しよう、イサギは目論み、名前の主を断とうとした。母親を石像で痛めつけながら、イサギはその感覚に既視感を覚えた。父親を殺した時の感覚と似ていた。イサギは間違いを認めながらも、自分が間違っていないことも理解した。鏡を見てしまったら、誰が父親を殺したのか、犯人の顔を覚えていたので、わかってしまうのを防ぐために、イサギは無意識のうちに、入院してからというもの、頑なに動かない鏡をみようとしなかった。イサギは自身の直感を理由も無しに信じた、自分自身に感謝した。イサギの直感は、ある部分においては間違っていないかった。

十五

廊下は照明がついていなかったので薄暗く、あまり周囲が見えなかったが、だんだん夜目がかいてきた。母親の腹にカエルのような穴を開けたが、流石に骨は見えなかった。黒くて

底のない円を眺めることは、いくらでも時間を注ぎ込むことができたが、その場を立ち去ることにした。母親が事切れると、イサギは名前を失った。

かつてイサギだったその女は、洗面所で手を洗った。顔をあげると、動かない鏡がそこにあった。動かないのだから、そこにあるのは当たり前のことだが、それが何故かおかしくて、女は少し微笑んだ。自画像が完成する前に、動かない鏡を見なくてよかったと、再び心の底から安堵した。鏡は一枚の絵として完成しすぎて、私が手を加える隙がない、と思いつながらも、惚れ惚れとしながら女は鏡を覗いた。美術館で名画を鑑賞するように、女は鏡に惚れ抜いていた。しばらく堪能した後、女が顔を背けると、合わせ鏡は消え失せた。

スグリからもらった靴を脱ぎ散らして、女は無限に続くように思える廊下を歩いた。女の顔はもはや動くことはなかった。女は足音を立てなかったが、耳を塞ぎたくなるほどの静寂を、裸足から発していた。その静寂こそが足音であると言えるのであれば、十分すぎるほどの響き渡り、寝静まる人々の耳に届いているのだろう。安息を求めて、女は廊下の奥へと消えていった。やがて女の足音は消え、廊下には埃のように静寂が積もりはじめた。

→水鏡パート

それからしばらくしたある日、雨に濡れたあの街のあの店に、旅人が偶然通りかかった。

「すみません、ちょっとあまやどりしてもいいですか？急に降ってきてしまっ……どこかで傘を売ってませんか？どなたかのものをお借りできませんか？」店の中にいる全員が押し黙った。街に行く人々は合羽を羽織り、フードを被り皆うつむいて歩いていた。もうこの街に傘の職人はいない。